

石部先生を囲む

研究報告委員会

考古学の石部先生が、97年三月に御退官になる。宇都宮大学での御在職期間は九年とかならずしも長くはないが、この間専門の御研究だけでなく地域の文化活動や学生の指導に当たられ、国際学部設立後は文化学科学科長として新学部の基礎作りに尽力された。御退官は私たちにとって大変残念なことであるが、この機会に思い出・考古学研究の軌跡・宇都宮大学国際学部への御提言などを語って頂くことにした。(聞き手は研究報告委員の北島滋と石浜昌宏)

石浜 残念なことに、石部先生にはこの三月で御退官ということで、研究報告委員会としましては第三号をその記念号とさせて頂きますが、この機会に先生にいろいろお話を伺いたいと思ひましてお忙しいところをお時間をとって頂きました。よろしく願いいたします。

石部 こちらこそ。

子供時代と戦争体験

石浜 私ども考古学は門外ですから、ピント外れなことをお聞きすることにもなるかも知れませんが、これを読む学生や同僚のことも考えまして、まず先生の生い立ちから考古学入門というあたりのことをお伺いしたいと思います。大阪市にお生れになって、東京に移られましたのは、コレは小学校の……

石部 三年生……大阪の小学校に二年はいたから三年生のときですね、こちらに来たのは。

石浜 そしてすぐに市川の方にお移りになったということで、その頃の市川っていうのは。

石部 この前市川に行ってみたんですけども、マア様変わり、どこでもそうですけどもね。ホント松林が多くて、きれいなところだったですけどね。東京のすぐお隣ですが。

石浜 で、はじめ学校で大阪弁でしゃべっていいめられたとかそういうことはありましたか。

石部 ウーン、いじめられないけども。いまでも感謝しているのは、ボクは大阪では劣等生だったんですけどね。学校が変わったら国語、読み方の時間だったかな、先生がボクばかり指名するんですよ。朗読がうまいっていうんですけど、今考えてみると大阪弁が面白かった(笑

い)。だけど、誉められるってことはいいことですね。本読むのはもともと好きだったから、それからますます好きになったんですかねえ。

石浜 その頃お読みになったというのは。

石部 イヤ、童話ばかりでした、小学生ですから。小学校高学年ぐらいからは陸軍幼年学校を目指す子と海軍の方を目指す子とがいてね、海軍の方が受験年齢がおそいんですよね、私はできるだけ遅い学校に行った方がいいと思っていましたね。ただ数学ができないから経理学校は無理だから海軍兵学校に行ったらかと……「おまえナンカ無理だ」なんて先生から言われましたけど。

石浜 その頃もう歴史とかお好きだったんですか。

石部 歴史や地理が好きになったのはなんでかよく分からないんですかども、ひとつは親がワリと旅行好きでアッチ行ったりコッチ行ったり、北海道から台湾まで。営業マンみたいな仕事してたから。そういう旅行の話を聞いて地理が好きになりましたね。台湾の高砂族のところに行ってきた写真を見せてくれたりしてね。それともうひとつは、学校の先生が見てきたように授業をする、ヤッパリわれわれも見てきたようにやらないといけませんね。あの頃ですから歴史っていったら、神武天皇が終わると南北朝、吉野朝、楠木正成の大奮戦でな話ですよ、あとはないんですよ。ところがホントに湊川の合戦で最後に弟正季と刺し違えて自殺する、そういうところを見てきたように話してくれる、演

劇やってるようにね。そのときボクは、そんなんだったら（先生の言ってることがホントだしたら）いっぺん神戸の湊川ってところに行ったら（農家の一室で死んだというんだから）鎧や兜なんか見つかるんじゃないかなンテ、その頃ソウ思ったんですがね。阪神大震災でそんなものが出たって話ききませんけども。あんまり見事に先生が話するから、それを裏付けてみたいという気がしたこと、立証ですね、それもたくさんありましたね。これが考古学に対する興味の始まりかもしれませんけどね。

石浜 それで歴史の本を読んでみようとか。

石部 ウーンあんまりね、『古事記』とかね、当時はイヤでも読まされたから。

石浜 天皇の名前をズーと覚えるなんてこともやらされたんですか。

石部 アアイウのは嫌いで、あまり覚えませんでしたけど。今でも言えないくらいだから（笑）。

石浜 いまだって歴史は「天皇の歴史」って部分はかなりありますけどね。

石部 当時は徹底的にそれがやられましたからね。「オマエタチハ、オマエタチデアッテオマエタチデハナイ」って毎日繰り返しましたからね。

石浜 それから中学校へ。

石部 中学校はもちろん旧制ですから。ボクが受験勉強で一番苦労したのは小学校から中学にはいる時でしたね。あの頃は今の受験勉強と同じで、成績が悪いとクラスが変えられちゃうん

ですね。合格できるクラスと、到底無理で予科練ぐらいにしか行けないその境目あたりに私いましてね、上がったたり沈んだり、しょっちゅうしてました。だから、授業が終わると補習で、日が暮れるまで。戦争中でしたからね、試験は止めないけども、答案用紙とか紙の無駄使いは国策に反するというんで、こんどは口頭試問、あれはマイッタですね。算数でもナンデモ先生が口で言うことを、コッチは答えなくてはいけない。

石浜 算数なんかは先生、どちらかというと。

石部 苦手でした。

石浜 やっぱり人文系の科目の方が。

石部 そうですね。

石浜 中学はどちらの。

石部 市川の中学です。そこに（農学部教授の）藤原（信）さんもいたんですよ。

石浜 そういうクラスの先生はずいぶんやりにくかったでしょうね。

石部 いや、藤原さんはともかく、ボクはとくにそんなことはありませんでしたから（笑い）。

石浜 その中学校に入学されたのが、43年ということで、その頃の学校の雰囲気というと。

石部 ボクは不良学生だったから、軍人勅諭知らないんですよ。嫌いだったし。これを毎日30分は配属将校が解説をやるわけ。毎日ですからね、あれほど面白くないものはない、直立不動でね。ボクはその頃は背がちょっと低かったものだから（その後で伸びたんですけどね）いつでも最後列に立つことにして、5分ほどする

と体を沈めて一直線にエスケープしたもんです（笑い）。別に反戦とかなんかじゃないんだけど、つまんないのを聞くのは嫌だったですからね。

石浜 時には見つかってブン殴られるとか。

石部 いや、先生だってそんなときには直立不動で動けませんからね。硬直せる軍国主義ってやつで、それが分かっていたらいくらでも抵抗できるっていうんで、やりました。

石浜 学生、生徒はいわゆるバンカラな感じで。

石部 そう、その頃はみな学帽を被ってますからね、その記章を余所の学校の生徒に取られるものすごく不名誉なんですよ。やられるよりヤッチマエてんでね。三人か四人集まると、モウやる前に憲兵か特高どっちかが来て「貴様等、なにやってんだ」っていうわけですから、なかなか取れませんでしたけども。

石浜 授業なんかはどうだったんですか。

石部 最初の一年はありました。二年目は途中から動員されましたが、田中先生や宮本先生とは紙一重で（一年若かったから）工場に動員にはならなくて、中山競馬場だったんですよ。だから勤労働員が楽しくってね、ほんとうに。馬を飼ってただけだから。朝行って馬に飼料を食べさせて、あとは涼しい間競馬場を乗り回して、連れて帰って昼寝して、また夕方ってことで……

石浜 この頃は競馬は行なわれていなかったはずですが、この馬はどういったことに。

石部 破傷風とか、医療用の血清を作るために

馬の血を抜くんですよ。馬に注射をして病原菌を入れてから、ワクチンを作る、そういうための馬だったらいいんだけど、いまの国立予防衛生研究所の一部だったと思うんですけどね。勘繰ると731部隊の日本版であった可能性もある、いまさら追求しようがないですけどね。馬に時々注射して、注射された馬は生きているうちに殺して、血を抜くんですわ。その血の一滴も無駄にしてはいけないというんで、馬の上に乗ったりして……マアほんと、よくあんなことやらされたと思うんだけど。

石浜 施設としては競馬場のものを使って。

石部 ええ、だから普通は馬に乗って遊んでればいいんで、勤労働員としては恵まれてましたね。ただそういうオープンなところですからね、完全に安全とは言えないので、ある日艦載機からカーチスP51だったかグラマン・ワイルドキャットだったか忘れたんだけどものすごい高いところ飛んでいるんですね、アメリカの飛行機は。馬を一頭入れ忘れてたんですよ、誰が忘れたのか、ボクのせいじゃないんですが、ボクはちょうど馬小屋の入り口にいたから、フラフラ歩いて馬の轡を取ろうと思って上を見たらキラッと光ったですよ、向こうの飛行機が。つまり、コー飛んでるやつがコーなったわけ（身振り）ですわ。アアッと思ったらもう、みるみる近ずいて「ビュー」！ 中で見てる奴は「伏せろ、フセロー」というんですが、ボクは勇気がないからね。あの時教えられた通りにやってたら、死んでたですよ、伏せてたらね。だけど

馬の手綱を持ったまま、走りまくったわけです。パッと後振り返ったとたんに土の壁がビューと走ったですね。

石浜 ああ、機銃掃射のね。まるでアレじゃないですか、『禁じられた遊び』の。

石部 アアそう、だから『禁じられた遊び』の親たちは伏せたおかげで死んじやった……そういう死ぬ思いは三遍しましたけどね。

石浜 それが一回目。

石部 いや、家にいるときに爆弾が落ちて、それが一回目だったかな。休みの日かなんかで、家にいたんですよ。マア空襲だから音は聞こえてましたが、それがだんだんダンダン音が高くなって、そのうちに雑音みたいな変な音になってくる。エライ低空飛行だな今日は、と思っているうちに「爆弾ダー」ってね。家の押し入れの布団掻きだしてオフクロを先に突っ込んで、それから弟を抱いてボクが飛び込んだとたんに頭ぶっつけた、そのとたんに落ちたわけ。それから周り見たんですけど、どこにも落ちてないですよ。近所の人に「大丈夫ですか」なんて声をかけて、家に帰ってきたら、屋根の上が土だらけで、10メートルか20メートルか離れてないところに落ちたんですね。幸い市川は砂地ですから、深い穴になってこんなふう。あの時は五発落ちて、ボクんところが一発目なんだけど、五発目だけ直撃食らって死んでます。マアあんまり死なないもんですね。

石浜 それは44年頃。

石部 そう44年ですね。もう一回はほんとに罪

深いんだけど、昼間の空襲ってのがタマにある。隣の村に焼夷弾が落ちたんで、友達と一緒に見に行こうってわけで出掛けた。途中で下駄の花緒が切れかかって、ヨタヨタと大分遅れをとっちゃった。元気のいい子が走って行ってそのまま消えちゃいました。そこにナパーム弾が落ちちゃって。そのままボクは逃げ帰りましたね。「ワッ」いうんでね。あの頃のナパーム弾はたいしたことはない、瞬間的に5メートルぐらいパッと広がる、それだけですけどね。

石浜 それも44年で、45年になると。

石部 一番印象に残っているのは東京大空襲。忘れられないですよ。夜中じゅう、朝夜明けまで、どんなすごいパノラマ、スペクタクル映画見たってかなわんです。360度ですからね。初めから終わりまで全部見た。て言うのは市川でしょう、攻撃受けてるのは東京で下町だから、川を挟んですぐお隣。一番最初に来たのはB29が一機か二機で、灯火管制、東京真っ暗のところにまず来て、野球場と一緒に、曳光弾を投下するんですよ。ものすごく大きな落下傘で、東京の町は昼間と同じになっちゃう。次に編隊が来て、その時西風だったですよ。横一列ぐらい焼夷弾を落としました。最初はまるで飛行機がウンコしているみたいでね。黒い塊がポトポトポトってね。それが途中まで落ちると、パッと火が入って無数のランプ、赤ランプ、一つひとつに落下傘がついて広がっていくような、その無数のランプがゆっくりゆっくり落ちだすんですよ。地上から数十メートルのところまで

行くとそれがまた開く、そうすると火の雨になる。それからひと呼吸おくと赤いのが黒くなる。それを先ず風上に撒くわけですね。次に来た編隊は二手に別れて両側へ撒いた。そして最後に来た編隊が、逃げ道を閉ざすように真ん中に撒いたわけです。計画的な人殺しですね。これはなんと言っても自分の目で見たわけですから。

石浜 それを市川という一番よく見えるところからご覧になったということで。

石部 それだけじゃなくてね。日本の方でも高射砲が鳴りっぱなしですよ。B29は全部サーチライトで照らされて大体5、6機に一機、モットかな、かなりの確率で火ふきましたね。かなりの頻度で直撃型というのかな、空中爆発する。

石浜 ア、それではやられっぱなしじゃなくて、かなり反撃もしたんですか。

石部 市川には地対空ミサイル(?)があったんですよ。そう日本だってバカにしたもんじゃない。ただ一つしかない。他の高射砲は確率が悪くてばっば、パッパというだけ。その頃『ロケット高射砲』といってましたかね、だからこっちは「ロケット高射砲ヤレー」なんていってると、出し惜しみするようにね。

石浜 それで翌日ぐらいから避難する人たちが大変に押し寄せて来たという。

石部 ソウ、次の日がすごかったなあ。市川橋が近くだったので行ってみたら、来る人間の前後が分からない、ただ真っ赤なものが二つ付いているのが前だと。皆放心した状態でね、いろんなものを大事そうに持ってるんですよ。子

供だから悪いことしちゃったけど、女の子に「にわとり持ってなにしてるんだ」って聞いたら、気がついてね、「お母ちゃんがない」って泣きだしましてね。

石浜 市川あたりまで何も考えないで逃げてきたわけですね。

石部 そう、大人もね。

石浜 あの辺では食料事情はどうだったんですか。

石部 ヤミがありましたし、ボクは競馬場に行っていましたからね。満州大豆が配られましたけど、そんなの馬に食わした覚えはありませんね。表面の汚れたところだけを削って、それは馬にやりましたけども、中の黄色いところは全部自分たちで食べましたね。馬用のエサをね。

石浜 雑炊に入れるとか。

石部 イヤ、そんなことはしない、みんなそのままですよ。あとは大豆油の絞り粕だから、蛋白質が豊富ですからね、別にうまくはなかったけど、腹のたしにはなりましたよ。馬は藁と競馬場の草。家に帰るとボクは長男だから辛かったですね。天下の朝日新聞に雑炊の作り方が書いてあってね、もちろん何を使うかが書いてあって、出来上がったら箸を立てて「立つようなら水が入れ足りない」ってね、パタッと倒れるんでは栄養不足「箸がゆっくり倒れる程度に水を入れなさい」というわけ。そんなもんでしょ、こっちは育ち盛りだから一杯啜っちゃうともう一杯食べたくなる。そうするとオフクロが「弟が死んぬじゃう」って叫ぶんですよ、モウ

なさけない。爆撃とかも恐かったけど、それは一瞬のものだから、ホントの恐怖というのは食物ですよ。食物がない辛さってものはモウ、だから戦争中よりも、敗戦後が一番深刻だったですよ。食うものがなにもないんだから。

石浜 でも、あの辺はヤミ物資の通路でもあったわけですよ。

石部 ソウ、そうです。生きていかなきゃしょうがないですから、買い出し部隊ってのがね、しょっちゅう通るわけですよ、競馬場のところもね。それで、8月15日、これはさいわいにも親父が仕事の関係で満州大使館に出入りしていたもんだから、一週間位前に天皇の詔勅は降伏だっていうのを聞いてきて。たいしたことないですね、帝国の防諜体制も。敗けるって親父が言ってるから、どうしても聞こうと思って競馬場の運動場に整列させられて、聞こえない鉦・ラジオ、ガーっていつててね、それにラウド・スピーカーつけるからよけい聞こえないですよ。どうしても聞きたかったから、悪い仲間と競馬場の馬に乗ってね、家に行って聞いたわけですよ。マア、それはいいんだけど、聞きおわって外に出たら、大人たちが騒いでるんですね、なにをしてるのかと思ったら、買い出し部隊の帰りの連中を半殺しにしている。「今、天皇陛下がおそれおおくも……されているのに」というわけ。ボクはまた帰らなきゃならないから、フクロ叩きの手伝いをしてから競馬場に帰りました。そうすると皆悄然としてましたね。敗けたということが分かったんでしょうね。

石浜 戦争が終わったということについては、「空が青かった」とかいろんなことが言われていますけれど、先生の印象では。

石部 その日だか次の日だか、アメリカ軍の飛行機が超低空でびゅんびゅん飛び回りましたね。そういう雰囲気ですね。

石浜 解放感もあったでしょうね。

石部 解放感もありましたけど、一面では恐怖感もね、進駐軍が上陸してくるから何されるかわからないという。

石浜 その終戦の時が中学校二年。

石部 そうですね。ちょうど学制改革の最中で、中学は五年制だったんですがね、ところが新制への移行期というので、行きたいやつは五年まで行って高等学校の三年に編入になるって形だったんですかね。四年で止める子は修了して大学にいてもいいと。ボクは早く行った方がトクだっていうんで、四年で止めて予科に行きました。

考古学への道

石浜 もうその頃は考古学をやろうとお決めになった。

石部 ええ、戦争敗けてしばらくして、家の遠い親戚に当たる人が来ましてね、市川の周りにはいっぱい貝塚があるっていうんですね。「貝塚ってなんだ」⇒「石器時代の遺跡だ」⇒「石器時代ってなんだ」⇒「神武天皇より前だ」っていうから、そんなことがあるはずがないってね。「ハズがないんじゃないかって、あるんだ」っ

ていうんで、行ったらアル、ある。それからモウ放課後、家に帰るとカバンを放り投げて、日が暮れるまで貝塚荒らし。その頃学校でも課外活動ってのが始まりましてね、それでサークルでやろうじゃないか、っていうようなことになり、それが病み付きになったということですかね。

石浜 その指導をしてくれた人というのは。

石部 その頃、東京の都内で（日比谷かなんかで）有名な大学の先生が、いろんな文化講座をやりだした。今じゃそんなもの聞く学生はいないでしょうけど、その頃も少なかった。新聞のチラシを持って行くと学生割引ってことだったかな。マア、いい時代だったんですね、民主主義がなにかも分からないし、なに授業で教えていいか先生にも分からない時代だったから、「今日昼から授業休んで東京に行ってきていいですか」「なんだ」「これこれコンナことで」「ヨシ、行け」なんてもんで。だんだん味をしめて「先生、ロードショウってものが来たんですけど、知ってますか」「ナンダ、それは」「映画です、日比谷のスパル座っていうところで、後学のために見ておかないと」「よし、行ってこい」（笑い）ほんとに、よかったですね。

石浜 「貝塚荒らし」をして、これがどの時代のものであるとか、そういう勉強はどういうふうにされたんですか。

石部 その頃になると、『考古学の話』とか、分かりやすい本が何冊かでてましたね。ヨレヨレの仙花紙でしたけどね。そんなに分かったと

も思えないけど、縄文土器などは見分け易いですからね。

石浜 中学時代にはそういった講座を聞きに行ったりということのほかに。

石部 恩師がちょうど国学院の出身で、その人は中国史が専門だったですけどね。その頃ボクは東洋史がワリと好きだったから、今だったら通用しないけれども戦前の学者に市川鑽次郎という人がいたんですが、その人の『東洋史統』という三冊本で漢文ばかりで難しかったけど読んでいた。その頃は教科書がないからアドリヴで先生も話をしてたんで、先生もドウモその本を読んでいるらしい。先に読んでおけば点取れると思って。試験の後で誉められると思ったら、怒られた「オマエなあ、カンニングなんかするもんじゃない」。カンニングなんかじゃない、先生が読んでいるのを知っていたので同じ本を読んでいたって言ったら、仲良くなっちゃってね。その先生が国学院だったらこんな先生がいると教えてくれた、またソレがすごいんですね、柳田国男、折口信夫、武田祐吉なんてね。「コレハ、ここだ」と思って入ったですよ。

石浜 折口信夫の授業というのは。

石部 モウ神様みたいだったですね、周りの人の先生に対する接し方ね。今でも羨ましいですね、折口先生の授業だと、始まって五分もすると助手がコウ、息がかかないようにお茶を持ってきて、一遍ボクらもやってほしいな。授業ぶりは女性的で、内容はお書きになっている通りですね。

石浜 そこで考古学でもいい先生がおられて。

石部 ところがね、今でもそういったふうは残っているけれども、その頃考古学は歴史学の中でも差別されていましてね。国学院なんてところは文献史学が強いところだから、考古学をやるっていうだけで、学生も差別されちゃう。ボクは考古学研究会に入ってたから、バレルと単位もらえないんですよ。そういう雰囲気でした。だから、資料はたくさんあったですけど、考古学の本が少ない。それで、卒論も書けないですからね、東大の人類学教室に日参して、だから国学院半分、東大半分ぐらい。

石浜 そうすると東大でも、歴史といえば文献で、考古学をやろうとすれば人類学教室という。

石部 というより、東大文学部の考古学っていうのは戦後かなりたってから充実してきたんで、東大では戦前から理学部の人類学教室の方が中心だったんですよ。まだ、学問が未分化で、考古学も人類学もいっしょくたですけどね。だから、できる先生がどちらかというと理学部にいて、理学部の人は理学部にいるだけで戦争中は軍隊に引っ張られない、研究費もタツブリついて、という事情もありましたね。その東大の先生のお一人が市川に住んでおられて、まだボクが中学のときから知り合いになって、その人の発掘なんか手伝ってました。

石浜 理学部でしたら、カーボン・デイトーグとかもうやってたんですか。

石部 ああ、あれはずっと後ですよ。日本でやるようになったのはずっと後だけでも、ボクが

市川の焼山貝塚ってところを掘ってると、ボツクイがでたんですよ。カーボン・デイトーピングのことは知ってたから（リヴィーというノーベル賞学者ね）、これをアメリカに送ろうかって、先生と話してね、新聞紙で包んだけど、今考えてみると、新聞紙もカーボンだからそんなことしちやいけなかったんですね。だから、日本のカーボン・デイトーピングの第一号にボクは関わったわけですよ。それから何年もしないうちに学習院で始めて、今では名古屋大学が一番進んでますね。

石浜 それから考古学が歴史学の中でも認められるようになってきたんですか。

石部 いや、そうでもない。今では考古学人口の方が一般の歴史学やっている人の数よりも圧倒的に多いんですよ。ところが、大学その他の研究機関に所属している研究者、いわゆる科学研究費なんかを申請できるような要件に恵まれている人の数ってことになると、考古学は十人に一人いるかいなかです。国立大学でも考古学専任教官を持っていないところが地方大学にはいくらかもある。歴史の教官がいない大学はないですけどね。だから文献史学偏重の雰囲気というのは今でも抜け切っていないわけ。歴史学には違いないんだけど、学問の方法が全く違うからなかなかドッキングできない。最近では考古学も近・現代史まで食い込んできたから、歴史やっている人も考古学を無視できなくなって、だんだん変わっていくとは思いますがね。国際学部でもボクの後任とはいわないけ

れども、いつか考古学の専任教官が来てくれるといいんですがね。国際学術交流ということになると、技術の面といい予算の面といい日本の若い学者が引っ張り尻ですからね。

石浜 しかし、栃木県に来るとなると、先生が前におられた大阪などと比べて、古墳とか一級資料に乏しくて、考古学研究者にはどうなんでしょうか。

石部 考古学というのはいい学問で、文字資料とちがって、中央だけに偏在してるってことはありません。人がいたところにはどこにも遺跡あるもんですから。栃木県にも無数に遺跡があります。それは心配いらない。

石浜 しかし一級の遺跡を調べて何かを導き出すという方が注目されますよね。

石部 その辺に世間一般も研究者も誤解があるんですね。超一級の遺跡を発掘して新聞に顔写真入りで報道されると、自分が偉くなったみたいに考える。でも、そうじゃないでしょう、遺跡は誰が掘ろうとそこにあったんだし、大切なのはそんなすばらしい遺跡に対して、どんな精度の高い調査をしてどういう結論を導いたか、そっちですよ、評価は。

石浜 話を少し戻しますが、学部を卒業して同志社の大学院にお入りになったのは。

石部 さきの東大の先生は、酒詰仲男教授という人なんですが、ボクが学部を卒業するときに、ちょうど同志社大学に移られることになった。ボクは将来学問をやろうなんて思っていなかったけれども、親が苦労しているから親は自分の

仕事を継がせる気はなかった、そんな時に先生が「京都に行くから一緒に行かないか」と誘って下さったから、じゃ御供してということで行ったんですね。

石浜 それは、ずいぶんいいタイミングで。そういうことって人生にあったり、人によってなかったりするもんでしょうけど。関西は生まれ故郷に近いということもあったですか。

石部 それはありましたね。近畿地方の研究をやりたいなあ、とね。そうするとどうしても、向こうは縄文より弥生・古墳時代が中心ですからね。だんだん研究の関心が新しい時代に移ってきて、古墳時代ばかり好きになる、そういうことになっちゃったんですね。

石浜 そういう意味では（ボくらから見ると）派手な遺跡が沢山ある畿内はやっぱりいいですね。

石部 そうそう、それはそうですね。

石浜 それでそれからはプロってことですね。

石部 いえいえ、半プロで。

石浜 しかし、その当時博士課程まで修了するというのは、珍しかったんじゃないですか。

石部 そうですね、多くはなかった。

石浜 博士課程終わったらどうしようとかは、考えておられたんでしょう。

石部 いや、あんまり考えてなかった、なんとかかなあと思ってたですけれども。どうも大学に残るのは無理だなあということは分かってきましたね。その頃は学科に、考古学の先生

はお一人でしたから。

教員生活と反骨的教育観

石浜 そういう学問の勢力としてはマイナーな考古学を勉強しておられて、しかし生活はしなくてはならないですね。

石部 そんなだから、教員ぐらいしかないですよ。だけど教職の勉強なんかやってないしね、マア大阪府が間違っって採点してくれて助かったんですね、きっと。五分遅れて行ったし、だめだと思ってたら、受かっちゃった。それが教員になるきっかけでした。

石浜 後に、定時制に移られたのは、昼間フィールド・ワークができるからということですか。

石部 マア、それも多少ありましたね。しかしそれより、教頭試験の時にたいがい人がエリート高校に行きたがってね、できない子の方ではできる子よりもはるかに数は多いんだからそんな教育論ばかりではだめだって言ってね、それで教頭になれたと思うんだけど。落ちこぼれの、アルファベットだって読めない高校生もいるんだし、現にこうしている間にもシンナー吸って死にかけているのもいるんだし、そういう子も同じ高校生なんだ、なんて言ってね。定時制は経験二年だったですけど、可愛かったですね。

北島 そういうところから先生の「教育というのは手間暇かけてやらないと、ナカナカ難しい」という持論が出てくるんだと思いますが、こういった教育観というのは定時制をお持ちになる前からもあったんじゃないでしょうか。その辺

のところをひとつ。

石部 マア、先程も言いましたように、ボク自身が劣等生に近かった。エリートになったことは一度もないので。そういうこともあると思いますよね。東京に引っ越したのは深川だったんですが、小学校の学区はいわばスラム街で、親戚の人なんかはボクを越境入学させるように勧めたんだけど、オヤジは頑としてはねつけた「法律違反なんかしたくない」ってね。それはボクにとってとても良かったですよ。そんなところにも光る子はあるんだろうけども、経済事情が悪ければ勉強はできないっていうのは当たり前の話で、そうするとボクは急に優等生になってしまった。自信がついたし、逆に畳と洗面器しかないような家に住んでいる友達が実にいい子だ、というようなことも分かってくる。こうこうするうちに戦争に敗けて権力っていうものに徹底的にイヤ気が差した。

石浜 その『権力』というのは、どんな形で最初に見えてきたんですか。

石部 それはいろいろありましたよ、権力というのが威張っているだけでなく腐っているというのが分かったのは、学校の校長室。戦争中警戒警報が鳴ると、当番の生徒（中学二年生ですよ）は、夜中であろうと警備のために学校に行かなければいけなかった。ボクには楽しいことだったですけどね。行ったら空襲警報が鳴れば防空壕に入ってなければならないってことになっていたんですが、ボクらは入るものじゃない。「校長室にイコー」っていうんで、灯火管制、

真っ暗ななかを校長室に行くと、角砂糖とか当時絶対に手に入らないものがワンサとあるわけだ。そりゃマア来客に出すためでしょうけどね。そんなもの盗っても叱りようがありませんよね（笑い）。そういう権力の裏側の汚さっていうのがだんだん分かってくる。ところが、敗けたら手のひらを返すようにめ、進駐軍にヘイコラしてるわけで。

北島 そういったことが、先生の学問観、古墳の研究に繋がる道筋にある。

石部 そう。世の中の矛盾ってものが気になってくる。戦争中には間違った歴史を徹底的に教えられた⇒真実を教えろ⇒天皇制を徹底的に暴かなければならない。といってもハッキリしたイメージを持っていたわけではないですけども、少なくとも古墳時代に興味を持ったというのはこうしたことがありますよね。いわゆる無階級社会から階級社会に移行するメカニズム、その中でも日本という特殊な国の成り立ち（世界史の中では非常にイレギュラーなね）、その原点にあるのが、古代国家が成立する前夜の古墳時代、その秘密を解く鍵を握っているのが（もろもろの民衆の遺跡も大事だけれど）やっぱり権力そのものの一番の中心で一番情報量の豊富な大古墳、というわけですね。それを宮内庁が独占していて見せてくれない。

考古学の現在

石浜 教育観の話から思いがけなく、先生の研究姿勢のもう一つの原点も教えて頂いて大変面

白く聞かせて頂きました。その定時制務めに至るまでに、多くの業績を残されたわけですが、その間考古学研究も理科学的・学際的な方法を含めてずいぶん様変わりしたんでしょうね。

石部 いやー、残念ながら本当に学際的にやろうと思うと工学部並みの研究費がないとどうにもなりませんね。だから、将来は大学ってところは研究機関としては没落するんじゃないでしょうかね。各都道府県に埋蔵文化物センターというのがどこにでもできているけど、そこでアルバイトのおばさんたちが間遠先生も使わないような高価な機械を使ってさっさと仕事をしている。能率・精度、とても追いつけません。

石浜 しかし、そういうことも含めて学問全体としては進んでいるわけでしょう。

石部 いや、そういきいたいところだけど、そうはいかない。埋蔵文化物センターなんてところが中心で、大学が落ち込んでいるってことは、もう学問の歪みなんですよ。ああゆうところは、開発があると止むを得ず掘ってるわけで、掘ることに追われてる。ボクらの場合はなにかの課題を明らかにしようと遺跡を調査するんですが、今違うでしょう。あそこに高速道路通るから掘ってくれ、とこういうことですから、その技師は惨めで、学問の最前線にいるためにだめになってしまうんですよ。昨日は縄文、明日は近世、次は城跡。課題もなにもなくなってしまうですね。山ほど仕事抱えて。それが日本の現状ですよ。だからやっぱり、科学としての学問の府ってというのは大学だと思うんですよ。大

学を充実させないと、あたらあれだけ沢山のものを見つけても、それを総合するってことができませんのでね。

石浜 国の文化予算というものをもっと考えてもらいたいですね。ところで話は先生が宇都宮大学に赴任されるところまで来ましたので、今度は大学の未来像を作るために現在精力的に活動されている北島さんに聞き手を交替して頂きます。

宇都宮大学での九年

北島 先生は88年に初め助教授として宇都宮に来られたわけですが、そのキッカケというのは。

石部 こんなことを言うのはよくないのかもしれませんが、モウお亡くなりになったので言ってしまうと、東京のさる私立大学の有名な世界史の先生が、その学校の考古学の教授の席があいたのでどうだ、と誘ってくれた。わざわざ大阪まで話に来てくれたし、尊敬している立派な先生なのでボクは快諾した。ところがボクは『札付き』ですからね、理事会で引っ掛っちゃってね、招ぼうとした先生も札付き、当人は輪をかけて札付きというわけで、その話ボクはシャッちゃったんです。その先生がボクを大変気の毒に思ってたところから、考古学のできる教師を求めている宇都宮大学の松木先生と学会で出会って紹介してくれた、とソウいうことですね。

北島 エッ、その『札付き』という意味は。

石部 マア、大学生のうちから既成の学会に反

発して『青年考古学協議会』なんてのを作って暴れたりね、それに（ボクがズーとやってきた）文化財保護運動なんていうのも、大体嫌われるんですよ。

北島 じゃ、石部先生というのは考古学界では暴れん坊ということになっているんですね。

石部 いや、いつでも正論を言っているだけなんですけどね。

北島 それで、宇都宮大学の教養部に来られて、今国際学部で活躍されているわけですが、今この大学で一番の問題点というのは、先生はどうお考えですか。

石部 難しい話ですね。そうですネエ、ホントにいい大学に迎えて頂いて、この九年わたしの人生の最高の時を送らせて頂きましたことを、先ずもって感謝いたします。先生方もいい方ばかりだったし、加えて学生もとてもいい学生に恵まれて、わたしほど幸せな教官は宇大の中にもそういないのではないかと、ソウ思うような年月を過ごさせて頂いたんで感謝以外にはありません。

石浜 恐れ入ります。もちろんそのお言葉はそのまま、掲載させて頂きますけれども、(笑い)、現代の学生一般に対してはやはり厳しいご意見もお持ちと思いますが、それは私たち教官にも別の形で課題になることですから。

石部 いまの学生にとって大学というのは一般に就職のためのステップということですから、マアしょうがないことかもしれませんが、ボクらのころは、大学に行くってことは、即、学問

をしに行くということだったんですね。今は大学と学問が必ずしも連動していないし、先生方も研究者を育てようという気持ちは少ないだろうと思います。学生の方もそうでしょう。しかし、大学というのは、そこで育った学生が次の世代を担う助教授・教授になる、そういうふうに育てていく、ということで初めて大学といえるんじゃないか。やる気のある子を育てて、次代の宇大を担うとか一流の研究者になっていくような、そういう教育を忘れちゃいけないんじゃないかな。だから学部の仕事は就職させるだけじゃありませんよね、研究者を育てるというアカデミックな雰囲気ももう少しあった方がいいんじゃないか。

石浜 その点、大学院ができて修士までということでは、現在の学問水準のなかで、専門家を養成するには中途半端というところもあり、私たちも心配しているんですが。

石部 ボクはさいわい教育学部の方で毎年卒業生を受け持たせて頂いてましたのでその経験でいうと、ドクターまで行ったのは一人。これは宇大の修士を出て、いったん就職しましたが、どうしても学問を続けたいというんで、ドクターはウチにないから新潟大学にやりました。それが一人、それから卒論の時になって初めて指導した子で、サークルなんかには入っていませんでした。卒論のテーマを見つけてやりだしてから好きになっちゃってね、これは宇大に残ったところでボクはすぐにいなくなっちゃうし、その子がテーマにしたのは西の方の

研究だから「九州のどっかへ行け」ということで、結局熊本大学に行きました。そうやってちょっと手を掛ければ、将来研究の道に進むって子も出てくると思いますよ。そりゃモウ、一人か二人でいいわけですよ、ハッキリ言ってね。各先生一人か二人そういう子をお持ちになるようなことで、それは教官にとっても励みになりますからね。一方では就職の指導も達成しなければいけないので、コレはコレで大変なことですよね。

北島 育てるということは大変重い課題なんですけれども、しかし逆にいうと、いま宇都宮大学の教官に対して先生が残して下さる言葉として、何が教育という視点から見て欠けているとか、ここのところをもっとキチッとやりぬいたらどうかとか、そういった点で御提言を頂きたいのですが。

石部 難しいですけどね、ウーン。

北島 よく先生は手間暇かけてない和我々をお叱りになります。

石部 感じないことはないですね。とくに国際学部という学部の将来のことを考えると、ここ二三年がホントに勝負、きれいごとだけではヤッパリ世の中だめですからね。世間的に評価の高い学部、大学にしていかなければ、結局泣きを見るのはこっち。だんだん受験率は落ちてきて、あんな大学には行きたくないという雰囲気になってくる。国際学部の人気が落ちてくれば、他の学部からの風当たりも強くなってくる。これは、そこにズッという先生方にとって一番

問題ですからね。だから、「国際学部の先生だ」というだけで誇れるような、そういう学部に仕立てていかなければならないんだけど、新学部だから非常に難しいと思うんですよ。つまり、就職っていうことを考えれば、老舗の農学部や教育学部と競合になった場合に、いまのように漫然としていれば敗けると思うんですよ。先生方そうとうシンドイけれど、やっぱりきめ細かく進路指導とか、一人ひとりの学生に対して面倒見をよくしていかないと、脱落していく学生も出てくる。現に出てきているのに、そういった実態というのを殆ど擱んでおられない。就職するにもナンニシテモ、学生自身があるので、こちらは援助しかできない、やっぱり学生に対して冷たくしていたんじゃないかですね。学生と仲良くしないと。だからボクは学生に「研究室に行って怒る先生はいないんだから、もっと研究室に行きなさい」というんだけど、そういう気構えで先生方がいて下さるかどうかわからない。付き合い方は昔と比べて難しくなったかもしれないけれど、ボクの場合は教官とか教授だとかまったく意識しない。年は違おうと友達なんですよ。そのせいかも知れないけれど、飲み会なんていうとしょっちゅう誘われるし……

北島 その点では、ボクも反省しなければならないんですが、国際学部の教官と学生との間には距離が少しあるんじゃないか。先生の研究室とか実習室には、いつも、土曜日曜にも、学生が来てますよね。

石部 学生には「研究室というのは、二十四時間活用するところだ」といってあります。

石浜 学生との付き合いについては、時間的に余裕が少なくなっているということもありますよね。本質的でない仕事が多すぎて、本来的には最も大切な学生のための時間がとれなくなっている。

石部 それはホントにそうですね。だから飲み会なんかに誘われたって十回に二回行けたらいいところですね。学生もこの頃贅沢になってましてね、春だったかなサークルの学生が「みんなで温泉に行くんですけど、先生もどうですか」というから、ちょうど空いてたので「じゃ、行ってもいいぞ」って。でも、なんのことはない、車が一台足りないから先生も来てくれないってということ（笑）。運転手ですよ、でも一緒にいれば楽しいですよ。

北島 もう一つ、教官の業績、研究をめぐる問題についてはいかがですか。教育その他で時間に制限があるにしても、もう少しやれるはずだとか……

石部 マア、偉そうなことはいえませんが、比較的ノンビリなさっているような感じがすることは、率直にいますね。ボクの場合もいま頼まれ仕事が多くって自分の研究ができないんですが、マア長年やってきたので仕方がないんでしょうけれども、もっと若い、とくに助教授ぐらいの段階だったら、そうそう外から仕事が舞い込まない暇な時にしか研究はできないもんだぞ、ということで頑張らないと。

北島 その忙しい中で、先生はアカデミックな世界と外の社会と分けた場合に、社会に対してもおおいに発言なさっていらっしゃいますね。

石部 それは、考古学がいま危機的状況にあるからですよ。考古学だけじゃなくて、文化財が危機的状況にある。

北島 一般的に国際学部の私どもの仕事ぶりを見ても、少し学内に閉じ籠もりすぎるきらいがあるとはお感じではありませんか。

石部 ウン、それもありますね。もうちょっと自分の研究を地域社会に還元していかなければいけないんじゃないかという気持ちはいつでもあります。

北島 その時に先生は、例えばどのような視点から地域社会と繋がりを持つべきだとお考えになりますか。

石部 いろいろありますよね。例えば『中禅寺湖の総合的研究』とか、いまは学際的な研究の時代ですからね。また、生涯学習の時代ということになってきて、これも大切です。学問がどんな学問であろうと、地域社会はいろいろな形で特に宇大の先生を求めているんじゃないですかね。

北島 先生が宇都宮大学に対して大変な御功績を残されたということは、誰でもが認めるところですが、これから大学を去られたあと先生は御研究の方に全エネルギーを傾けるということ……

石部 いえいえいえ。もうもう。普通の会社だったらとっくにもう、五年も前に定年になってい

るのを、五年だけ延命させて頂いてホントに感謝しているのでアリマシテ、もう社会的にするべきことも少しはしたかなと思っておりますから、晴れて定年になりましたら隠居になろうかなと思っております（笑い）。

石浜 それは、早く隠居してくれないかなアと思っている人もいるかも知れませんね（笑い）。マ、しかし、この宇都宮大学にも集中講義という形で来て頂く約束が出来ていますし、古巣の大阪にお戻りになるということで仕事の依頼も多いとは思いますが、御自分の研究ももう少し自由になさりたいところではないでしょうか。

石部 そうなんですね。もう少し自分の時間がほしいですね。多少それができるかなと思っておりますが、どうですかね。

考古学アラカルト

北島 先生の御性格ですと御自分の研究以外のことにも結局関わってしまうということになりそうな気がします。

石部 頼まれると断れないという妙なところがあるようで、いけませんね。

石浜 例の『十四学会』との活動でしょうか、『天皇稜』の問題でよくテレビに出ておられましたが、今後もしばしば画面で顔を拝見したいものですね。そういった『札付き』の札は取らないで頂きたいと思います。それに先日出されたような新書版の一般的な本を今後も書いて頂きたいですね。

石部 あんまり売れるものではありませんけど

ね。

石浜 税務署向けの発言かな、本屋では平積みにしてましたよ。

石部 でも、出版社ではオッカナビックリ出しているようですよ、「増刷してよろしいか」、「何冊？」というと、150冊、30冊とかっていうんですからね、二刷三刷で。それでちょっと売れなくなると絶版にしちゃう。

北島 話は少し変わりますが、先生は今までもっぱら国内の遺跡、考古学上の資料を発掘して御研究になっているんですけれども、今後朝鮮とか中国とかとの関わりの中で御研究をお進めになるという方向は考えておられるのでしょうか。

石部 ええ、もちろん今はもうそれを抜きにしては研究はできないし、日本の、特に西日本に籍をおいているような研究者は、韓国とか中国には必ず行ってるんですよ。西向き指向が強い。そんな時にボクなんか東に来ちゃってね、ヘンなやつだと思われている。でもボクはよかったと思ってますね。関東の方から見ていろんなことがよく分かりましたからね。その関東でも、例えば栃木県でも毎年誰かが韓国に行っているというわけで、学界でも日本だけやっているという人はいなくなってます。

北島 ちょっとアトランダムになるんですが、これを読んで下さる方へのサービスとしてひとつ伺いします。例の『耶馬台国』、あれは先生の御見解によるとどこにあったんでしょうか。

石部 もう四五年前のことだけれども、考古学協会の学会が奈良であったときに、ボクは奈良県の箸中山古墳、普通箸墓といっている人が多いですけども、それが卑弥呼の墓だって発表しちゃったんですよ。学会みたいなどころでは、みんな遠慮してそんなことは言わないんだけど、「あんなこと学会で言うのは石部さんが初めてだ」なんて言われましたけど。マア、断定的に言わないだけの話で、いろんな証拠で、もはや畿内に耶馬台国があったことは動きません。九州の学者もその点では同じです。耶馬台国論争はそういうわけで考古学の世界では少なくとも終わってますね。

北島 そうすると九州ってことはないんですね。

石部 九州はたしかに紀元前2、1世紀、その頃はピークです。突出してね、その頃に中国と直接交渉を持っていたのは九州だけです。紀元後1世紀ぐらいから九州は急激にポシャってくるんです。九州に陰りが出てきてその次に畿内に来るのかというと、どうもそうじゃない。その間にワンクッションがあって、それが出雲じゃないかナアと思いだした途端に、この間の話でしょう。嬉しくてしょうがない。山陰・北陸、中心はおそらく出雲だと思いますけどね。

石浜 それは、当時の動きが日本のある部族を中心としているのではなくて……

石部 それはモウ、東アジア史の一環として日本史も動いているということです。後漢、つまり漢帝国と非常に親しかった九州は、後漢が

衰退するとポシャっていくわけです。その頃に中国人だけれども遼東地方から北朝鮮にかけて公孫氏という豪族がいて、それが一時独立国を作るわけです。それが朝鮮半島の北部まで領有するんですね。その時期がちょうど2世紀末から3世紀の始めなんですよ。で山陰が栄えるのがちょうどその時なんですよ。だから公孫と結んだのが山陰かなってね。ところが238年に、三国時代の魏がこの公孫氏を滅ぼすわけです。すると239年に卑弥呼がすかさず使節を送る。公孫と結んでいた山陰はアッという間に没落しちゃうわけですね。山陰型の、弥生末期にできたような糸巻きのような形をした墓、すごい大きなものがあるんですけども、それは結局一時期山陰・北陸で流行しただけで終わってしまふ、そのあと前方後円墳。それは畿内から始まるわけです。だから、いままで言われていたような素朴な卑弥呼像というのは通用しない、国際関係に敏感に呼応していたんですから。

石浜 その辺が、日本国の歩みは主に日本内部の動きとして捉えたいという従来の歴史教育では分からないところで、そういったダイナミックな動きを易しく一般向けに書いた本はあるといいんですが。

石部 イエ、私がまだ書いておりませんから(笑い)。出雲に一つの時代があったということは、テレビなんかでも言い出す人は出てきてますけれども、ボクが割り切ったように出雲は公孫氏だというようなことまで、なかなか言い切れないからね。心ではモウ思っているのかも知れな

いけれども、一般啓蒙書を書くまでにはまだ
いってませんね。

北島 石部先生の場合は、発掘した資料に基
いて論証してくということなんでしょうが、そ
のところが……

石部 ソウ、資料に狂いがあるとダメになっ
てしまう。さっき言った箸中山古墳から、いま
まで我々が考えてたものよりちょっと新しい土
器がでてきちゃった。「ボクの敗けだ」とは書
けなかったけれども、そんなことを、つまり箸
中山は卑弥呼の墓じゃないってことを一時新聞
も書き立てましたね。ところが去年ですけどね、
古墳時代より一つ前の弥生時代の中ごろの神
殿みたいな建物の柱の根が残っていて、その皮
まで残っている、ということが分かった。とい
うことは、年輪を数えていくと、その木が最後
に切られた年が分かる。そうすると、いままで
弥生時代中期は紀元後と考えられていたのが、
百年上がることになった。近畿地方の弥生時
代の年代がね。そうすると、むしろ新しい土
器が出てきたからうまく合うんですよ。だから、
いま全ううまくいっております、実証面でも。

北島 私なんか今の時代をちょっと齧るっ
ただけで一生が終わってしまうんですけども、
それに比べて考古学っていうものが持っている
学問的な意味、現代に対して与える意味とい
うのはどんなものなんでしょうか。

石部 理屈ではいろいろ言えるでしょうが、
その逆の方向で教えられることですけども、
最近の考古学ブームっていうのは日本の場合、ソ

リヤすごいものなんですよ。催しがあると百人
五百人と集まり、なにかが見つかって新聞が書
き立てると、多ければ万を超える人たちが見
にくると、そういう状況になってる。そんなに
人が集まるってことは大事なことなんじゃない
かと、理屈抜きで。そういうことを言うと、新
聞記者が「だって、集まるのは女とお年寄りば
かりじゃないですか」なんて言うわけですよ。

「そうなんだよ。今の三十代、四十代の人
は会社組織に組み込まれていて、人間に戻る
のは定年退職になったときしかないでしょ」
って言ったら「アア、そうですね」って。人
間的に存在することがゆるされないような苛
酷な状況にある間は、歴史だとか遺跡だとか
文化財だとか、そんな気にもなれないだろ
うけど、いい例がありますよ。道路公団の所
長さんと、弥生式住居跡に道路を通す通さ
ないで大喧嘩したことがあってね。そした
らしばらく後で聞いたような人から手紙が
来てね、誰かなと思って読んでみると「昔
のこと覚えていらっしゃるかどうかわかり
ませんが、その公団の所長をやっていたナ
ニガシです。いまは史跡歩きをすることが
一番の楽しみ、云々」(笑い)。教えたとい
うより、逆にボクがその人から教えられた
気がしましたね。つまり、人間は今のシス
テムにいる限り、会社人間である限りは、
人間でなくなっちゃっているんだナア
って。そこから解放されて最初に飛び付く
ものが遺跡だとすれば、これは理屈なんか
抜きでホントに大事なものだ、そう思
いますね。一つ言えることは、人の一生、ど

んなに長生きしたって八十年か九十年、ところが考古学やっていけば四百万年生きられるよって。マア、知識の上だけかも知れないけど、でも実物を手に持てますからね、あらゆる時代の。仕事ですから、感動はだんだん薄れてきますけど、この年になっても感動することもありますよ。去年、ちょうど梅雨の真っ最中に青森に行って、日本最北の水田跡を掘ってるというから、雨に濡れながら二千年以上前の水田跡を見たときには涙が出たですね。条件がいいところには足跡も残っていますしね。文献史学ではおそらくそういう感動は味わえないと思います。考古学の強みですよ。

石浜 今後もよろしくお願いいたします。本日はどうもありがとうございました。

石浜 二時間半にわたって大変面白いお話を伺いました。最後に学生達にメッセージをお願いいたします。

石部 別れは辛いのお。寅さんの心境ですな。

石浜 寅さんは思いがけないときに、サッ帰って来ますね、四十何回も。

石部 この間タイに留学に行く子が「来年元気で帰って来ますから、先生も元気でいてね」って言うから「ウン、元気でいるよ」なんて言っちゃったけどね（笑い）

石浜 しかし、集中講義には来て頂けるんですから。

石部 どれだけお世話になりに来るか分かりませんが、少なくともあと二年間はノルマがあるようですし、お役に立つようなことがあればどうぞ御用命下さい（笑い）。